

複合名詞のアクセント

—N1, N2 がともに 2 拍以下の場合—

崔 聖 玉

1. はじめに

東京方言における複合語アクセントとその構成要素のアクセントとの関係は、必ずしも十分研究されているとは言えない。ここ数年行われている複合語アクセント研究の目的は、既に提唱されているアクセント規則を、絶えず変化し続けている現実のアクセントと比較対照しつつ再検討することにあつたと考えられる。⁽¹⁾

ところで、複合名詞のアクセント規則については、規則が適用される部分と、そうでない部分、即ち例外とがある。両者の関係を明らかにするためには、複合名詞のアクセントを、その構成要素のアクセントとの関わりにおいてとらえることが必要とされるが、言うまでもなくその基盤は、個別的な事例の分析にある。個別的な事例を検討することにより、どのような規則が存在し、それらがどのように体系をなし、また、どのようなものが例外となるかが決定される。

しかし、規則の追究はもちろんのこと、アクセント体系の解明は容易ではない。特に、前部要素と後部要素（以下の稿では、これをN1、N2と呼ぶ）が、ともに2拍以下の複合名詞の場合はそうである。例えば、詳細な事例の分析に基づき現代語のアクセント規則を追究している『明解日本語アクセント辞典』（1985）においても、N1、N2とも2拍以下の「名詞+和語名詞の癒合名詞」については、「前部のアクセント式によってきまる傾向がある」（p10）という指摘がなされているだけであり、そして、その付則ともいうべき説明もかなり複雑なものとなっている。このことは、この種の複合名詞にあつてはそのアクセント体系はもとより、アクセント規則の把握さえ容易でないということを意味している。加えて、複合語を取り扱う際にはいつも話題となる、例えば「やまいぬ」を複合名詞と見なすかどうかといった問題もある。⁽²⁾

このように、2拍以下の複合名詞のアクセント⁽²⁾に関しては様々な問題がある。しかし、1拍語、2拍語は日本語の語構成要素の中心になっているということ、そして1拍語、2拍語の多くは名詞であることなどを考え合わせると、複合語一般のアクセント研究を進める上で、2拍以下の名詞が結合した複合名詞のアクセント研究は必要不可欠であると考えられる。

本稿は、以上のような考え方にに基づき、2拍以下の名詞のアクセントと、それらを構成要素とする複合名詞のアクセントとの関係を考察することにより、統語上のアクセン

ト規則を把握することを目的とする。

資料には、右の秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典』(1985)と日本放送出版協会編『NHK日本語発音アクセント辞典』(1987)を用いたが、現今におけるアクセントのゆれを考慮し、必要に応じて東京方言のインフォーマントから直接聴取したものも使用した。

2. 複合名詞アクセントの決定

複合名詞(以下、CNと呼ぶ)アクセントの決定にN1、N2それぞれが何らかの関わりを持つと仮定すると、理論上、次の三つのパターンが考えられる。

- ①N1がCNのアクセントを決定する。
- ②N2がCNのアクセントを決定する。
- ③N1およびN2の両方がCNのアクセントの決定に関与する。

これらの妥当性を確かめるために、実際の例を取りあげて考えてみよう。平板型のハナ(花)をN1とし、N2に様々なアクセント型の語が来る場合を以下にあげてみる。

A ○○○○型

ハナ[○]フサ(花房、フサ)、ハナ[○]マキ(花巻、マキ)、ハナ[○]ヨメ(花嫁、ヨメ)

B ○○○○型

ハナ[○]ガサ(花笠、ガサ)、ハナ[○]ムコ(花婿、ムコ)、ハナ[○]タバ～ハナ[○]タバ(花束、タバ)

C ○○○○(平板)型

ハナイロ(花色、イロ)、ハナガラ(花柄、ガラ)、ハナゾノ～ハナ[○]ゾノ(花園、ゾノ)

これらを見ると、まず①は事実合わないことが明らかとなる。①のように、N1だけがCNのアクセントを決定する要因になっているとすると、CNに上のように三つのアクセント型が現われるはずはないと考えられるからである。次に、②を考えてみると、B○○○○型の場合、N2のアクセント(頭高型)とCNのアクセントとが一致しているので、N2がCNのアクセントを決定する要因となっている証拠と言えそうである。しかし、N2が頭高型であればすべてB○○○○型になるかということ、必ずしもそうではない。マキ、ゾノをN2とするCNのアクセントは、一方ではA○○○○○型(ハナ[○]マキ)で、他方では平板型C○○○○である。(ただし、ハナゾノ～ハナ[○]ゾノにはゆれがあるが。)また、フサ、イロをN2とするハナ[○]フサ、ハナイロも、互いにアクセント型を異にしている。さらに、平板型のヨメ、頭高型のマキ、尾高型のフサは互いに異なるアクセントを持つにもかかわらず、複合名詞を形成する際にはともにA○○○○○型の後半部分をなしている。こうしてみると、N2のアクセントだけがCNのアクセントを決定すると見ることに難点がある。しかしながら、上例におけるB○○○○型に見られるように、CNのアクセントを決定する要因としてN2のアクセントが大きく関与しているのでないかと思われる点は、見逃すべきではない。後にまた詳しく述べるが、N1とは無関係に、N2だけがCNのアクセント決定に関与していると判断される例は、実はかなり多く見出されるのである。

このように、①～③の可能性のうち、①が成立しないことは動かないにしても②だけ

ですべてが解決されそうにもないので、結局、②とともに③の可能性も考慮しなければならないことになる。しかしながら、これまでの考察から理解されるように、③についてもまた、「あるアクセント型Xとあるアクセント型Yとが組み合わさると、Zというアクセント型になる」といった簡潔な「公式」を得ることはできそうにない。結局のところ、②③いずれかの決定は、一つ一つの事例の吟味から始めるより仕方がないようである。⁽³⁾

そこで以下においては、②の「N2がCNのアクセントを決定する場合」と、③の「N1、N2両方が決定する場合」の二つに関して、事例の検討をした結果を踏まえつつ、そこに働いている規則を明らかにして行ってみたい。

3-1 N2がCNのアクセントを決定する場合

ここでは、N1のアクセント型は関与せず、N2がCNのアクセント型を決定していると考えられるものを見ていくが、これには起伏型のCNと平板型のCNとがある。

a 起伏型になる場合

ツブ (粒) : アワツブ (粟-, アワ)、コメツブ (米-, コメ)、スナツブ (砂-, スナ)

上の例のように、ツブ (粒) をN2とするCNアワツブ、コメツブ、スナツブはそれぞれN1に頭高型 (アワ)、尾高型 (コメ)、平板型 (スナ) を持ちながらも起伏型○○○に統一されている。すなわち、N1固有のアクセントとは無関係に、N2に立ったツブという語のアクセントが、CNのアクセント型を決定すると考えられる。このように、N2にツブなど特定の語が立つと、N1とは無関係にCNは起伏型となるが、このツブなど同類の語を第1語類とすると、それに属すものとしては以下のような語があげられる。なお、N1のアクセント型が関与しないことを表わすため、() 内にN1の単独のアクセント型をも記しておく。

シ (市) : イセシ (伊勢-, イセ)、	ナラシ (奈良-, ナラ)、	ミトシ (水戸-, ミト)
カイ (貝) : カキカイ (牡蛎-, カキ)、	トリガイ (鳥-, トリ)	
ルイ (類) : カイルイ (貝-, カイ)、	ジンルイ (人-, ジン)	
ゾラ (空) : アキゾラ (秋-, アキ)、	ツユゾラ (梅雨-, ツユ)	
カサ (傘) : ヒガサ (日-, ヒ)、	カラカサ (唐-, カラ)	
ムギ (麦) : コムギ (小-, コ)、	ナムムギ (生-, ナマ)	

このほか、ヒ (日)、ト (戸)、ガ (歌)、キ (季)、ウミ (海)、ゴエ (声)、ツブ (粒)、アメ (雨)、イチ (市)、ムコ (婿) なども同じ性格の語と考えられる。ところで、ヒガサ (日傘)、ナムムギ (生麦) のように、カサ、ムギなど頭高型の2拍語をN2とする複合名詞では、それが維持されてCN全体のアクセントとなると解釈することも可能である。しかし注意しなければならないのは、《N1、N2 ≤ 2拍》のCNにおいて頭高型がそのまま全体のアクセント型となるのは、これらごく限られた語をN2とする場合のみであるという点である。以上の考察から、次のような規則が導かれる。

アクセント規則1：《N1、N2 ≤ 2拍》においてN2に第一語類の語が立つとCNは起伏型になる。

ちなみに、ここで《N1 ≤ 2拍》という条件を取り外して、《N1 ≥ 3拍》とすると、上に取り上げた第一語類の語がN2に立つ場合だけでなく、2拍頭高型の語がN2に立つ場合も、原則としてN2のアクセント型はCNのアクセント型として保持される。

b 平板型になる場合

ケ(毛)：クセゲ(癖-、クセ)、クリゲ(栗-、クリ)、エダゲ(枝-、エダ)
クモ(雲)：アサグモ(朝-、アサ)、ナツグモ(夏-、ナツ)

これも前述の起伏型の例と同様である。ケ(毛)をN2とするCNクセゲ、クリゲ、エダゲは、それぞれ尾高型、平板型のN1を持ちながらも、平板型を取っている。

クモ(雲)をN2とする場合も同じく、N1であるアサ(朝)、ナツ(夏)、が頭高型、尾高型であるにも関わらず、CNは常に平板型である。これらケ、クモのように、N2に立つとCNを常に平板型にするものを第二語類と呼ぶと、その他これに属するものとしては次のような語がある。

キ(木)：ナエギ(苗-、ナエ)、ナマキ(生-、ナマ)、ニワキ(庭-、ニワ)
ハ(刃)：リョウバ(両-、リョー)、モロハ(双-、モロ)
コ(子)：ウジコ(氏-、ウジ)、ゲーコ(芸-、ゲー)、サトゴ(里-、サト)
ニ(荷)：クラニ(倉-、クラ)、シタニ(下-、シタ〜シタ)、ソコニ(底-、ソコ)
ヒ(日)：アサヒ(朝-、アサ)、ハツヒ(初-、ハツ)、ユーヒ(夕-、ユー)
イト(糸)：ケイト(毛-、ケ)、キヌイト(絹-、キヌ)、アサイト(麻-、アサ)
オビ(帯)：カクオビ(角-、カク)、カワオビ(革-、カワ)、コシオビ(腰-、コシ)
カゲ(影)：ヒカゲ(日-、ヒ)、イワカゲ(岩-、イワ)、ツキカゲ(月-、ツキ)
ネコ(猫)：オヤネコ(親-、オヤ)、ヤマネコ(山-、ヤマ)、クロネコ(黒-、クロ)
イヌ(犬)：コマイヌ(狛-、コマ)、メスイヌ(雌-、メス)、ヤマイヌ(山-、ヤマ)
オト(音)：クツオト(靴-、クツ)、ナミオト(波-、ナミ)、ミズオト(水-、ミズ)
オヤ(親)：ハハオヤ(母-、ハハ)、サトオヤ(里-、サト)
カベ(壁)：イタカベ(板-、イタ)、ツチカベ(土-、ツチ)、クロカベ(黒-、クロ)
ニワ(庭)：ナカニワ(中-、ナカ)、ウラニワ(裏-、ウラ)、ハコニワ(箱-、ハコ)

以上のほかに、頭高型名詞としては、カメ(亀)、タネ(種)、チベ(鍋)、ハト(鳩)、フネ(船)、マド(窓)、イタ(板)などが、尾高型名詞としては、タ(田)、ハ(刃)、カミ(髪、紙)、ハシ(橋)、アナ(穴)、イモ(芋)、オニ(鬼)、ハタ(旗)、ハラ(腹)が、また平板型としてはハシ(橋)、カマ(釜、窯)、ハコ(箱)などを挙げるができる。なお、この、CNを平板型にするグループは量的に最も多いといえるようである。また、N2には、1拍語2拍語において出現可能なアクセント型がすべて現われている。

ここで注目したいのは、上に挙げた語をN2とするCNが平板型で現われるのは、《N1 ≤ 2拍》という条件においてだけであるという事実である。すなわち、これらをN2とする

CNでも、《N1 ≥ 3 拍》であれば、CNは平板型でなく、中高校で現われる。つまり、《N1、N2 ≤ 2 拍》かつ上記の語彙群がN2に立つ場合に限ってのみ、CNはN1と関係なく平板型になるのである。以上の考察から、次のような規則が導かれる。

(アクセント規則 2) : 《N1、N2 ≤ 2 拍》においてN2に第 2 語類の語が立つとCNは平板型になる。

3-2 N1, N2 が CNのアクセント決定に関与する場合

前節では、N2によってCNのアクセントが決定される場合を見てきた。本節では、CNのアクセント型の決定にN1が関係を持つとみられる例を検討してみたい。もちろん、これらはアクセント規則 1、2 適用外のものばかりである。

ハ(歯) : キンバ(金-、キン)、マエバ(前-、マエ)、ムシバ(虫-、ムシ)

ウタ(歌) : コトウタ(琴-、コト)、コウタ(小-、コ)、ハナウタ(鼻-、ハナ)

ヌシ(主) : ジヌシ(地-、ジ)、ウマヌシ(馬-、ウマ)

ハ(歯)をN2とするCNキンバ(金歯)、マエバ(前歯)、ムシバ(虫歯)は、それぞれN1のキン(金)、マエ(前)が起伏型であればCNも起伏型に、N1のムシ(虫)が平板型であればCNも平板型になっていると見なされる。また、ウタをN2とするCNコトウタ、コウタ、ハナウタの場合もN1が起伏型であればCNも起伏型に、N1のコ(小)、ハナ(鼻)が平板型であれば全体も平板型になっている。同じく、ヌシ(主)をN2とするCNジヌシ、ウマヌシも、N1が平板型、起伏型であり一致している。すなわち、少なくともこれらの例においてはN2のアクセント型とは無関係に、N1のアクセント型によってCNのそれが決定されていると考えられる。しかしながら、ここで注意すべきなのは、N1のアクセント型がCNのアクセント型を決定するという規則は、N2に立つ語が何であるかに左右されるということである。この、「N2に立つ語」とは、前述のアクセント規則 1 および 2 における第 1、第 2 語類には入らないものである。例えばキンバを例に取ると、この語においてN1であるキンが全体のアクセント型に一致しうるのは、あくまでハとの結合したときだけであって、例えばキンイロ(金色)、キンガワ(金側)、キンガン~キンカン(金冠)等においては、キンが頭高型であっても全体は平板型、起伏型となるのである。ここからも明らかなよう、ハ以外の語との結合においては、キンはCNのアクセント決定に関与していないと解釈される。すなわち、N1はあくまでも第 2 義的な役割を負うものであり、全体のアクセント型の決定にN1が関与するかどうかを決定するのはN2であるということである。キン(金)と同類の語を第 3 語類と呼ぶと、これに属するものとしては次のような語がある。

エ(絵) : カゲエ(影-、カゲ)、スナエ(砂-、スナ)、クチエ(口-、クチ)

メ(目) : ヨメ(夜-、ヨ)、ワキメ(脇-、ワキ)、トリメ(鳥-、トリ)

ユ(湯) : アサユ(朝-、アサ)、クズユ(葛-、クズ)、ウチユ(内-、ウチ)

ミ(身) : ナカミ(中-、ナカ)、ナマミ~ナマミ(生-、ナマ)、シンミ(親-、シン)

ユキ(雪)：アサユキ(朝-、アサ)、サトユキ(里-、サト)、ハツユキ(初-、ハツ)
 カミ(紙)：カラカミ(唐-、カラ)、カベガミ(壁-、カベ)、チリガミ(塵-、チリ)
 カゼ(風)：カミカゼ(神-、カミ)、シオカゼ(潮-、シオ)、キタカゼ(北-、キタ)
 ミチ(道)：ヨミチ(夜-、ヨ)、ヨコミチ(横-、ヨコ)、ウラミチ(裏-、ウラ)
 ムシ(虫)：フナムシ(船-、フネ)、ドクムシ(毒-、ドク)、ミズムシ(水-、ミズ)
 ハラ(原)：フハラ(野-、フ)、シバハラ(芝-、シバ)、スナハラ(砂-、スナ)
 スジ(筋)：チスジ(血-、チ)、タマスジ(球-、タマ)、クビスジ(首-、クビ)
 バリ(針)：ケバリ(毛-、ケ)、ツリバリ～ツリバリ(釣り-、ツリ)
 マツ(松)：コマツ～コマツ(小-、コ)、カドマツ(門-、カド)、アカマツ～アカマツ(赤-、アカ)

紙面の都合上、CNの例はあげないが、ヒ(火)、クツ、ハナ(花)、カオ(顔)、ミズ(水)、クチ(口)、カミ(神)、タバ(束)、ツユ(露)、ハシ(箸)、ヌシ(主)などもこのグループに属する語である。以上の考察から、次のような規則が導かれる。

(アクセント規則3)：《N1、N2 ≤ 2拍》のCNのN2に第3語類が立つとN1が起伏型であればCNも起伏型になり、N1が平板型であればCNも平板型になる。

アクセント規則3にかかわる語をN2とするCNの場合、アクセント規則1、2の語彙群をN2とするCNに比べ、アクセント型にゆれに伴う、ある種の複雑さを見せている。例えば、1拍の語がN2として用いられているCN(ナマリなど)は、起伏型と平板型とにゆれている。また、N2が頭高型の2拍語ではCNのアクセント型が複数になる。たとえば、N1が平板型のときは多くの場合全体も平板型となるが、同時に起伏型が行なわれていることもある。その他、2拍のN2が尾高型、平板型のCNハツユキ、ウラミチなどのように、起伏型が期待されるにもかかわらず、平板型になっているものも少なくない。これらは、アクセントがそのゆれにおいて、全体的に平板型へ移行している傾向を反映しているものと考えられるが、その理由は不明である。次回の課題としたいと思う。ただ、全体的に見ると、上記の語をN2とするCNの典型的なアクセント型は、N1が起伏型のときはCNも起伏型になり、N2が平板型のときはCNも平板型になるということだけははっきりしている。

以上の考察により、特定の語をN2とするCNにおいては、N1のアクセント型もCNの型決定に関与するということが確認された。ただし、繰り返すことになるが、その際、アクセント型を決定するのはN1であるといっても、それ以前に、特定の語がN2に立つことが前提条件となるのであるから、CNのアクセント型の決定においては、やはりN2が第一義的な重要性を持っているわけで、この点はアクセント規則1、2の場合と同様である。

4. ま と め

通例、複合名詞アクセントの大部分は一般的な原則によって予測できるといわれるが、

今日までの研究においては、その一般的原則の適用範囲はN1、N2のいずれかが3拍以上の比較的長い複合名詞に限られており、N1、N2がともに2拍以下の複合名詞については、例外として処理される傾向にあった。しかし、後者について行った本稿での分析結果によると、CNの型の決定に関し圧倒的に優位にあるのはN2であることが明らかになった。また、個別語彙のレベルを越える総体的な複合名詞アクセント規則は確認できないものの、3つのアクセント規則があり、2拍以下の語は3つの語群に大別されることなども明らかになった。実際のところ、ある語がどんな語群に属するのかを判別することは簡単にはできないが、N2に立つことができる語に限って言えば、3つの内のいずれかに属し、3つの語類のいずれかに関わっているということは言える。なお、ゆれによる例外は個別に吟味しなければならないが、N1を中心に整理しようとするゆれとは必ずしも関係のない例外や矛盾が少なからず生じてしまうのに対し、本稿のようにN2を中心に整理するとアクセント規則と3つの語群にあっては、例外もさほど多く見出されないのである。そして、このことは後部要素を中心として整理を進めて行けば、どのような複合語であってもそれが作られる際におけるアクセント規則を比較的簡単に解明できるのでないかということ、すなわち例外の少ない規則を得られる可能性を示唆している⁽⁶⁾。最後に、これまでの考察に知られるようにN1、N2の多くは和語であるが、漢語も同様に取り扱えることを述べて本稿を終りたい。

注

- (1) 例えば佐藤大和「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『講座日本語と日本語教育』明治書院、1988
霧岡昭夫「複合名詞のアクセント」『日本語学』7-7、1990
- (2) 岡田英俊「東京方言の複合語アクセント記述の体系」『言語研究』96、1988参照
- (3) なお、N1またはN2が3拍以上の場合でも、規則に合わない例がしばしば見られる。このような例の処理においてその語がどのようなものであるかを考慮する必要がある。この場合にはN1を考慮する必要がない。これに対して、本稿で取り上げられる、N1、N2がともに2拍以下の複合名詞の場合、3-1以下で述べるように、N2に立つ語を考察するだけでなく、N1に立つ語のアクセント型も考慮しなければならないものと考えられる。N1、N2ともに2拍以下の複合名詞におけるアクセント記述の複雑性は、このようなところに起因するものと考えられる。
- (4) 2拍2音節の語をN1とし、1拍の語をN2とするN1+N2においてアサヒ(朝日)は、異例で頭高型アクセント型をとっている。
- (5) ただし、平板型以外のアクセント型が決して現われえないということではない。ここに取り上げた語をN2とする複合語で、平板型以外で現われるものも少しある。例えばトシゴ(年子)、コネコ(仔猫)、デバコ(手箱)などがそれである。しかし、全体から見ると、本稿で取り上げた語の場合平板化する傾向がきわめて強いので、例外と見なして取り扱うことに問題はない。
- (6) 本稿の筆者は、現在、前部要素あるいは後部要素が3拍以上の複合語を分析しているが、後部要素を中心として考察を進めればその複合語のアクセントをよく説明できるという見通しを得た。分析の結果をいずれ論文の形で発表したい。

(筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学)